

都市施設がまちへの愛着に及ぼす影響に関する研究

東京大学 工学部 都市工学科 鈴木崇之

指導教員：浅見泰司教授・貞広幸雄准教授

1. はじめに

現在日本は人口減少の局面を迎えているが、このように縮小が進む都市において、都市計画を如何につくりまちをつかっていくかが課題となっている。そこで、住民の都市計画への参加が重要になってきている。行政だけで行うのではなく、住民も参画して策定された計画の方が住民の要望を反映するものとなる上、そのプロセスを通じて住民間、住民と行政の関係が近くなるのが期待されるからである。

しかしながら、現在の都市においては、この、住民の都市計画への参画は十分なものであるとはいえない。この理由として、行政自らが中心となって計画策定を行い、住民と議論するための土壌を用意出来ていないことが挙げられ、また、住民参加のための方法論が十分に確立していないことも一因となっている。しかし、住民自体にも十分な動きが見られないのも事実である。

では、住民がより積極的に都市計画に参加するにはどうすればよいのか。現在の都市においては、かつてのような近所付き合い、人と人とのつながりが薄くなってきている。そのため、人を介して参加を促そうとするのはより難しくなっている。そこで重要となるのが、住民のまちに対しての愛着である。地域やまちに対して愛着を持てば、まちへの積極的・協力的な関与を促す可能性^[1]や、まちへの愛着の向上が都市計画やまちづくりの関心向上につながることは既に指摘されている^[2]。まちにおいて人と人とのつながりが少ない将来においてその重要性は増すと考えられる。その、まちへの愛着をもたらすものとして、風土への接触^[3]、消費行動の際の店舗でのコミュニケーション^[4]などが示唆されている。

本論文では、都市の様々な施設への愛着とまちへの愛着の関連について研究する。その際、都市の施設として様々考えられるが、本研究では行政が携わることのできる都市の施設を選定した。さらに、これまで明らかにされてこなかった、施設への愛着をもたらしているであろう要因を定量的に調べる。また、まちへの愛着を持ちやすい個人属性についての分析も行う。最終的には、住民にまちへの愛着を持ってもらうための、今後の施設の在り方を示すことを目的とする。

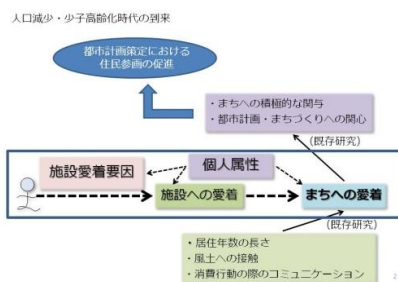


図 1 本研究の背景と目的

2. 研究方法



図 2 対象地域・対象施設

以上のことを、アンケートによって調べる。対象地域は目黒区都立大学駅周辺地域とする。対象施設は行政が関わりうるものとして、駅前広場 (A: 都立大学駅高架下広場)・図書館 (B: 八雲中央図書館)・広場 (C: めぐる区民キャンパス広場)・商店街 (D)・小学校 (E: 八雲小学校) とした。(図 2 参照)

また、まちへの愛着については既存研究^[5]において使用された 13 個の項目に分類した。施設への愛着については、この 13 項目の内当てはまるものを 9 個選んだ (表 1 参照)。施設への愛着の要因は、既存研究では、店舗における「話す」要因が考えられたが、それに加え、「触れる」「見る」「聞く」「思う」という要因を考え、それぞれの要因を全 10 項目に分けて評価する (表 2 参照)。

アンケートにおいては以上の各項目をまち、5つの施設について、4段階順序尺度で回答していただいた。また個人属性として、性別・年齢・職業・居住地・居住年数・同居人数・家族構成・子供の種類と人数を聞いた。

2009年12月4日～10日の街頭アンケートを行った結果、65名より回答をいただいた (1名無効)。回答者属性は、性別: 男性 15、女性 49・平均年齢 52 歳・対象地域内居住者 40、対象地域外居住者 14 などであった。

表 1 まちへの愛着、施設への愛着 各項目

施設項目	愛着	まち項目
	住みやすいと思う	●
●	お気に入りの場所である	●
●	歩くのは気持ちいい	●
●	雰囲気や土地柄が気に入っている	●
●	このまちが好きだ	●
	このまちではリラックスできる	●
●	このまちは大切だと思う	●
●	愛着を感じている	●
	自分の居場所がある気がする	●
	自分のまちだという感じがする	●
●	ずっと住み続けたい	●
●	いつまでも変わってほしくないものがある	●
●	なくなってしまうと悲しいものがある	●

表 2 施設への愛着の要因 各項目

触れる	聞く
よく利用する	音を聞く
くつろげる場所がある	思う
遊びに行く	そこに行くと同じ人に会う
話す	昔から使っている
人と話が出来る場である	誇りに感じる
見る	
見た目が良い	
よく目にする	

3. 分析概要

・まちへの愛着に関する因子分析

先のまち愛着の項目について、因子分析を行った結果、2つの因子を得ることができた。第1因子を「現在好意・親近感」、第2因子を「帰属意識・持続願望」と名付けた。

さらに、被験者の因子得点をプロットした結果、以下のように3つのグループに分けた（まち愛着因子分析グループと呼ぶ）。

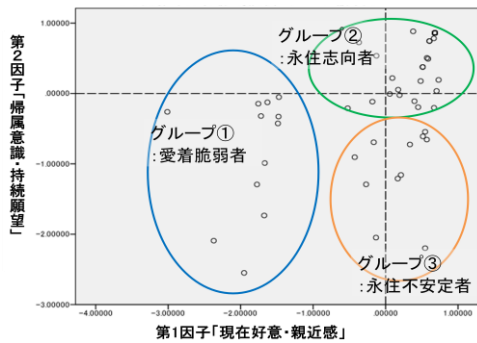


図3 被験者 因子得点プロット図

・個人属性とまちへの愛着の関係

ここでは、個人属性の年齢・居住年数・居住地内外・子供有無を説明変数、上記まち愛着因子分析グループを被説明変数とする重判別分析を行った。「標準化された正準判別関数」「グループ重心の関数」より、主に以下のことが言える。

「年齢が若い、子供を持っている人はグループ③「永住不安定者」に入りやすく、年齢が高い、居住年数が長い、子供を持っているのはグループ②「永住志向者」に入りやすい」

若く子供を持っている人は「永住するか不安定」な状態であり、居住年数を重ねるにつれ「永住を志向」する様子がこの結果から予想される。現在少子化が進んでいるが、その対策を行うことによって人口減少を止める効果はもちろん、住民を「永住志向」に誘引し、住民のまちへの愛着を高める効果も同時に期待される。

また、この判別分析で特に負荷量の大きかった子供の有無について、子供を持つ人と、持たない人はまちに対してどう感じるかの違いがあるのか、ということを判別分析によって調べた。その結果、このまちに対して**雰囲気や土地柄が気に入っている、リラックスできると感じる**ことが、子供を持たせることに関して強く効いていることがわかった。この結果は例えば、都市計画マスタープランに少子化対策を含める場合に有効と思われる。

・施設への愛着とまちへの愛着の関係

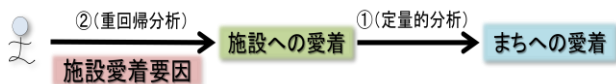


図4 施設への愛着とまちへの愛着 分析概念図

ここではまず、まちへの愛着を高める上で施設への重要な愛着を、まち愛着因子分析グループを用いた定量的な分析によって求め、その次に、各施設において重要な愛着をもたらす要因を重回帰分析によって求めた。

つまり、この重要な要因はまちへの愛着を高める上で大きな意味を持つと考えられる。その結果を表したのが以下の図であり、得られた愛着、要因をそれぞれの施設について誘導することが住民のまちへの愛着を醸成していく上で重要である可能性がある。

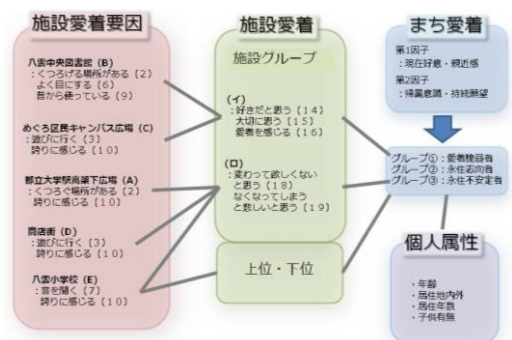


図5 まち愛着へつながる個人属性・施設愛着及びその要因

・施設への愛着、要因と属性の関係

5つの施設それぞれについて、属性別に関する分析を行った。この分析を行う目的は、多様な目的や対象に応える施設を目指し、施設への愛着を増進することである。

表3のように各施設について分析を行った。例として、商店街についての結果を表したのが図6である。このように、施設への愛着、施設への愛着の要因それぞれについて主成分分析を行い、各年代について得られる主成分得点を順位付けし、スピアマンの順位相関係数を用いて解釈を行った。主な結論として、若い世代にとっては商店街で活動することと買物以外の用途が大事であり、高齢者にとっては見た目の良さが重要であることが分かった。先のまちへ愛着との関係から得られた結果（図5）と合わせて、今後の商店街の将来像を考える上で役立つと考えられる。

表3 各施設について行った分析

施設	対象とした属性	分析手法
都立大学駅高架下広場	年齢	主成分分析
八雲中央図書館		主成分分析
めぐろ区民キャンパス広場		判別分析
商店街	居住地学区内外	主成分分析
八雲小学校		判別分析

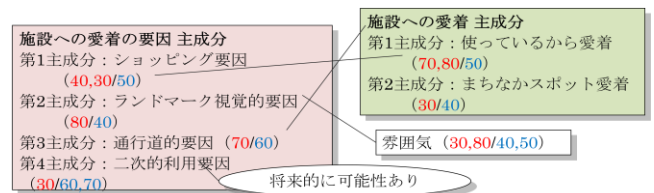


図6 分析結果の例：商店街

4. おわりに

本研究では、まちへの愛着の因子分析で得られたグループを用いてまちへの愛着と個人属性、施設への愛着とその要因の関係を分析し、さらに主成分分析などを用いて施設への愛着、要因と属性に関する分析を行った。その結果、(1) 子供を持ち、長く住む人ほどまちへの愛着を持ちやすい (2) 駅前広場にはくつろぐ空間がまちへの愛着を持たせる上で重要 (3) 若い世代にとっては商店街で買物以外の用途を持たせることが愛着をもたらすなどの可能性が明らかになった。

上記 (2) や (3) のような結果から、今後の施設整備方針に活用することが実用例として挙げられる。ここで明らかになったまちへの愛着をもたらす上で施設が果たする役割や目的や対象に応じてあるべき施設のあり方は、今後、行政がそれぞれの施設を整備する必要が出てきたとき、あるいは新たに建設することになったときに活用できると考えられる。

今後の課題としては、第1に、今回は女性の割合が高いなど、被験者に偏りが出たため、より信頼性を高めるためにデータ収集の改善が必要である。第2に、愛着の因果関係や時系列変化については、分析結果を解釈することにより得たため、それをより明確にする研究を行うことがこの先重要である。

[i] Brown G, Brown B, Perkins D. (2004). New housing as neighborhood revitalization. *Environmental and behavior*, vol.36 No.6, pp.749-775.
 [ii] 松田和香, 石田東生. (2000). 都市計画マスタープラン策定過程におけるパブリック・インボルブメント活動および情報提供が市民意識等に与える効果の分析. *都市計画. 別冊, 都市計画論文集* 35 pp.871-876.
 [iii] 鈴木春菜, 藤井聡. (2006). 「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究. *土木学会論文集D*, 64 (2), pp.179-189, 2008.
 [iv] 鈴木春菜, 藤井聡. (2007). 利用店舗への愛着が地域愛着へ及ぼす影響とその規定因に関する研究. *都市計画論文集*, 42 (3), pp.13-18.
 [v] 萩原剛, 藤井聡. (2005). 交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析. *土木計画学研究・講演集*, vol.32.